

バランスではなく、現場で「最適解」を選び続けるということ

前川 武雄

自治医科大学附属さいたま医療センター皮膚科教授

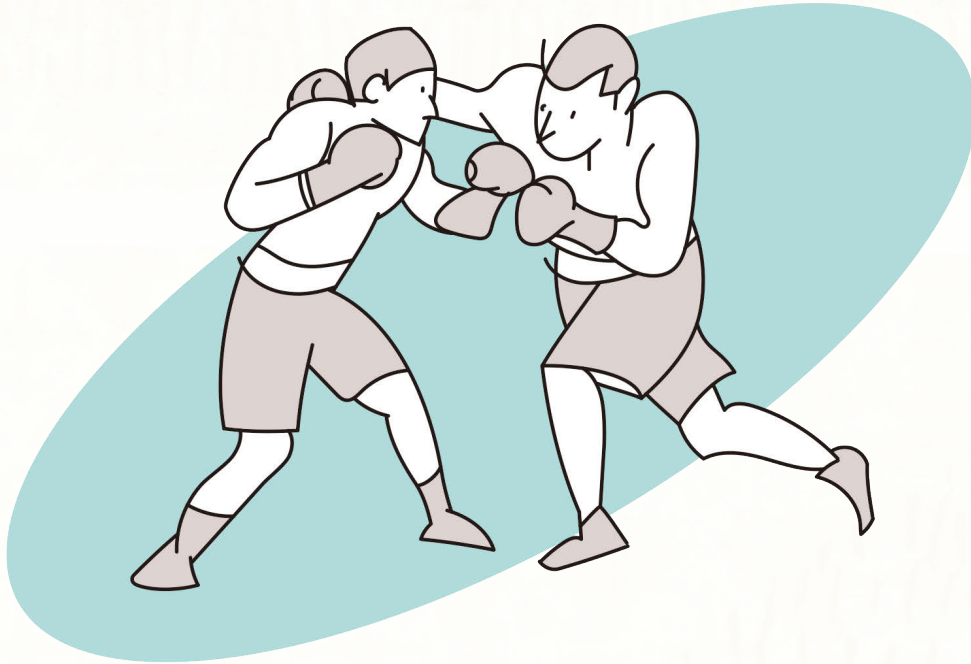
外来診療や手術に追われる日々の中で、ふと「ワークライフバランス」という言葉を思い出すことがある。しかし正直なところ、この言葉が世間で語られるような、仕事と私生活を天秤にかけ、きれいに釣り合いをとるような状態として実感できたことは、ほとんどない。

私は主に皮膚外科、とりわけ皮膚悪性腫瘍の診療に携わっている。悪性腫瘍に対する外科的治療において、判断の誤りや術式の選択が、患者のその後の人生に直結する。とくに難易度の高い手術は張り詰めた緊張感を伴い、予定通りに進むとは限らない。切開して組織を広げて初めて直面する予想外の進展に、その場での決断を迫られることも少なくない。そこに存在するのは「バランス」といった穏やかな概念ではなく、刻一刻と変わる状況下での「優先順位の組み換え」そのものである。

また、私は約20年間、プロボクシングのリングドクターとして現場に立つ機会ももってきた。熱狂する観客の声が響く中、試合中のわずかなインターバルで選手の状態を見極める。「続行可能か、止めるべきか」。その一瞬の判断は、選手のキャリアのみならず、ときには生命をも左右する。リング上では、迷う時間は1秒たりとも与えられない。そこでもやはり、バランスを考える余裕などはなく、その瞬間にもっとも妥当だと思われる決断を、自らの責任で下すしかないのだ。

こうした経験を通じて感じるのは、仕事においても生活においても、「あらかじめ整ったバランス」などというものは存在しない、ということである。むしろ重要なのは、そのときどきの状況に応じて、「いま、何を最優先すべきか」を自らに問い続け、最適解を導き出す姿勢ではないだろうか。

家庭においても同様だ。仕事を立て込む時期にはどうしても家庭に割ける時間は限られ、逆に家族の事情によって仕事の予定を調整せざるを得ないこともある。とくに、予期せぬ



体調不良や変化がおこりやすい乳幼児を育てる環境では、昨日までの計画が今日には一から立て直しになることもしばしばだ。理想的な時間配分を維持し続けることはむずかしく、現実には激しく揺れ動きながら、そのときどきの最善を選んで進んでいくしかない。

振り返ってみると、私はワークライフバランスを「整えよう」と意識してきたというよりも、その都度の現場で「最適」と思える判断を積み重ねてきただけなのかもしれない。そして、その泥臭い積み重ねこそが、結果として現在の私の働き方、ひいては生き方につながっている。

医療を取り巻く環境は変化し、働き方の多様性も広がりつつある。しかし、どのような制度や仕組みの中にあっても、最終的に判断を下すのは個々の医師である。バランスという言葉に縛られすぎのではなく、自分なりの基準で優先順位を考え続けること。それがプロフェッショナルとして、また一人の人間として、誠実な生き方なのではないだろうか。

これからも、明確な正解のない中で、現場ごとに最善と思える判断を1つずつ丁寧に重ねていきたい。